

「デイスカバー! マイセルフ」としての 「ボランテイアホリデー」

原 直行 (香川大学経済学部教授)

●私の体験から

私は都市農村交流、グリーン・ツーリズムを研究している学者であり、今でも週に1回は四国のあちこちに調査に出かけている。愛媛県でも久万高原町や西条市でグリーン・ツーリズム推進のお手伝いをさせていただいている。そんな私の体験から話を始めさせていただきたい。

それは今からちょうど20年前の'88年夏まで遡る。当時私は大学2年生だった。教養課程で経済学部に進学するコースにいた私は、経済学部に進むべきか悩んでいた。1年生のときから自主的に経済学の勉強をしていたのだが、専門書を3〜4冊読んでも少しも面白いとは思えなかったのだ。私の通っていた大学は、2年生の時に学部を変更できるチャンスがあった。私は東京生まれの東京育ちであったが、都

会よりも農村に強く魅かれていた。人が自分のペースで自分らしく暮らすことができるのは都会ではなく、農村だと思っていた。親の故郷が長野県佐久であり、盆・正月には毎年訪問し、同年代の親戚たちと田舎で楽しく遊んでいたことがそのように思う背景にあったのかもしれない。悩んだあげく、私は進学先を経済学部から農学部に変更することにほぼ決めた。

「ほぼ」と書いたのには理由がある。農学部に進学していいのにかについても確信が持てなかった私は、実際に農業体験をしてみても、その後で進学先を正式に決めようと考えたからだ。運よ



お世話になった牧場の方々 (左端が筆者)

く知人の紹介で、北海道の広尾で牧場を経営している畜産農家に、一週間住み込みで牧草刈りと牛の世話をさせてもらえなかった。まかない付きだが、バイト料はなし、もちろん東京から北海道までの旅費も自分持ちであったが、私には願ってもない話であった。お金がない

学生のことである。北海道に行くにも往復1万5千円くらいのフェリーで片道30時間、そこからJR(民営化された直後であった)、バスを乗り継いで東京から広尾まで出かけていった。やっとたどり着いた牧場は山の中で、お世話になる畜産農家以外は見渡す



かぎり緑一色だった。

翌朝から作業が始まった。先ず朝5時30分に畜舎にいる牛の餌やり、畜舎の掃除から始まる。それが終わると広大な牧場に行き、既に刈り取られスジ状におかれている草を乾燥させるためにフォークでひっくり返し、一方で乾燥が終わリミカン箱2個分くらいの大きさに梱包された干草をフォークで刺してトラックに乗せ、トラックいっぱいになった干草を倉庫で積み上げる、という作業を日没までやった。夕方になると体力もなくなり、干草をフォークで刺して持ち上げるのもかなりシンドかった。草負けして手首の辺りは傷だらけであった。そして最後に一度牛の世話をし終わる。

牧草刈りは気象条件からこの時期（7月下旬）に集中してやらなければならない



お世話になった牧場



山積みされた干し草

ということ、1年でもっとも忙しい時期であり、食事は農家の庭先で、睡眠時間も削って全員で取り組んだ。人生でこれほど肉体労働をした1週間は後にも先にもない。今ではとても体がもたないだろう。だが、メチャクチャ楽しかった。農業がイヤだとは少しも思わなかった。そして、迷わず農学部に進学することを決めたのだ。た—まわりまわって今は経済学部の教員であるが。今でも、早朝、牛の餌をとり外に出たとき、山から下りてきた2頭のシカと遭遇した場面、最終日の夕方、農家のオヤジさんに近づく川原で自分の進路について語った

場面を鮮明に思い出す。私の人生のかけがえのない瞬間である。

●ポランティアホリデーの意義

長々と自分の体験を語った。もう書ける字数も限られている。だが、今回「ポランティアホリデー」についての原稿執筆を依頼されたとき、私自身の体験を書くことが一番その意義が伝わると考えた。あの当時の私は「自分探し」、自分の選択の確認のために農業体験をしたのだった。いわば「デイスカバー・マイセルフ（自分自身の発見）」のための農業体験だった。そして、「ポランティアホリデー」という言葉は少なくとも20年前の日本にはなかったが、私のは「ポランティアホリデー」そのものだった。

「デイスカバー・マイセルフ」は若い時と、それから定年後などの第2の人生を歩む時に一度は通らなければならぬコトだと思ふ。都市農村交流は現在いろいろなカタチで展開し、交流の厚みは20年前と比べてはるかに増大した。「デイスカバー・マイセルフ」としての「ポランティアホリデー」は今後も一層その重要性を増していくことだろう。